

第2章 いわゆる「尻上がり」イントネーションについて

本章では具体的存在としての「話調」の一例として、またイントネーションの談話機能や文体表示機能を端的に示す一例として、いわゆる「尻上がり」イントネーションを取り上げる。当該イントネーションの出現は比較的新しく、非文末のイントネーションであるため、これに関する言語学的、実証的な先行研究はごく限られている。第3章で明らかにするように、当該イントネーションは音声的に見れば、本研究では「平調」、「上昇調」、「下降調」などと並ぶ6種の句末イントネーション類型の一つである「昇降調」に分類され得るが、従来の扱いは極めて感情的かつ一面的であった。一般に、当該イントネーションが一体何であるのか、なぜ注目すべきなのかに関しても十分に理解が得られていない。したがって、当該イントネーション自体の詳細な音響的特徴や実態、機能に関して述べる前に、2-1 では当該イントネーションを取り巻く諸問題を名称、出自、評価などの点から概観する。2-2 では当該イントネーションの音響的特徴を他のイントネーションと比較しつつ先行語アクセント型別に明らかにする。2-3 で詳述する通り、当該イントネーションには、音声面だけでなく、他のイントネーションには見られない談話・文法上、すぐれて特異な機能を備えている。さらに、いわゆる「擬似疑問」イントネーションや「村岡花子調」などと並んで、談話レベルの音調を特徴付けると考えられる文体表示機能を持つ。「話調」研究の端緒として当該イントネーションを取り上げる意義もこの点にある。2-3 ではこのような当該イントネーションの談話・文法上の機能、実際の使用状況を各種の実例から明らかにする。さらに2-4 では、当該イントネーションにまつわるステレオタイプについて、筆者が行った各種の調査結果をもとに、言葉に対する一般的なバッシング現象を踏まえ、当時の社会状況など様々な角度から社会言語学的に分析し考察を加える。2-5 では、いわゆる「尻上がり」イントネーション現象の分析から帰結した、実証的で客観的な、談話レベルにおけるイントネーション研究、ひいては「話調」研究が、社会言語学においていかに重要な課題であるかについて述べ、「話調」研究の意義を明らかにする。

2-1. いわゆる「尻上がり」イントネーションの概要とその問題点

はじめに当該イントネーションの概要や問題点を明らかにするため、音響的特徴と名称、実際の使用状況や使用意識と評価の乖離の問題について概説する。次いで、厳しい批判的評価を受けたにもかかわらず、当該イントネーションが広く普及した背景を、日本人の言語生活の変化やそれに伴う習得方法の年代差に着目して考察する。これによって、当該イントネーション

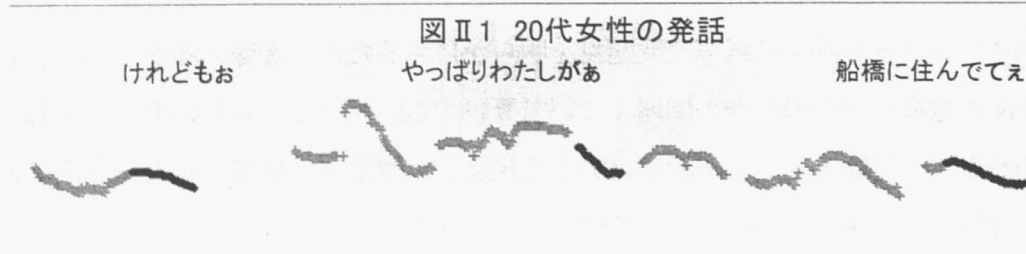
研究が談話とイントネーション研究の結節点としての重要な意義を持つとともに、社会言語学的にも非常に興味深い現象であることが理解されるだろう。

2-1-1. 音響的特徴と名称の問題

ここでは、いわゆる「尻上がり」イントネーションの音調がどのようなものか、簡単に説明する(詳細は2-2)。そして、当該イントネーションの名称に関する問題点について考える。

本研究で扱ういわゆる「尻上がり」イントネーションとは、**図Ⅱ1**の例文中の太字部に現れる濃い線で表された音調を指す。**図Ⅱ1**からもわかるように、当該イントネーションは各種の俗称である「撥ねあがり調」、「語尾上げ語尾伸ばし」などとは異なり、実際は小さい上昇(ピッチパターンから上昇が確認できない場合もある)の後に大きな長めの下降のある音調を持つ。音声的にみれば、川上(1988、1992、1993)や井上(1994、1997)の指摘する通り「昇降調」というべき音調である。「上がる」点に注目した俗称がいくつか見られたのは、井上(1994)が指摘するように、「フレーズの終りで自然下降が期待されるところで上昇があることが耳だつ」ためだと考えられる。

そしてこのイントネーションに対する多くの識者の態度は、基本的には「不適切な」あるいは「不愉快な」現象であるという、新語や流行語に対する一般的な態度と変わらないことが各種のエッセイから伺える(詳細は2-1-3)。また言語研究の対象として扱われることも稀であった。名称が一定しないまま今日に至ったのも、当該イントネーションが比較的新しいイントネーションであるためばかりでなく、学問の対象として扱われることが少なく、ことさら定義する必要がなかったことが理由の一つとして考えられる。現在は、あまりに広く普及して使われるようになったため、名称も定まらないまま、ほとんど何も言及されなくなった状態に至ったと言えるだろう。言及されなくなった理由の一つは、井上(1997)が指摘するように、「言語変化が抵抗の少ない形で進むのに、さまざまな形での中間的な形態(「中間方言」など)をとる」ためであり、当該イントネーションの場合も極端なピッチの上昇下降を伴わない型が広く普及したことが考えられる。この点について柴田(1989)は、「一時ほど目立たなくなったが、むしろ、上の世代



にも浸透し始めている。」と指摘し、川上(1993)は、当該イントネーション非難を知る者が、極端な上昇下降を抑えて起伏を小さくして使った旨の指摘をしている。実際、筆者と同世代の人の多くは改まった場面での当該イントネーション使用を控えるよう教育されてきたし、現在は以前ほど極端な上昇下降を伴ったパターンは聞かれなくなってきた。

本研究でも第3章以降はこのイントネーションを実際の音響的特徴に照らして、様々な変異形を持つ「昇降調」の一つに分類する。しかし本章では、音声的特徴や使用場面などの事実だけでなく、当該イントネーションに伴うステレオタイプの印象など、社会言語学的側面についても言及していく。そのため「尻上がり」という名称をあえて使うことにした。それは、例えば携帯電話を「ケータイ」と書いて「携帯(電話)」だけでは表しきれないニュアンスを表現するのと同様である。

2-1-2. 出自の問題

ここでは当該イントネーションが、いつ頃どのようにして登場したのかについて考える。当該イントネーションの普及については、すでに井上(1994, 1997)で論じられているように、言語内的な要請とともに、「ネ・サ・ヨ」禁止運動の貢献が考えられる。なぜなら、当該イントネーションの音調が間投助詞の「ネ・サ・ヨ」を伸ばした音調とほぼ同様であり、これらの間投助詞と補い合う分布を示し、しかも一般には当該イントネーションと同じ音調と機能を持つてはいても、間投助詞は当該イントネーションとは別ものだと認識されるからである(井上 1994)。

出自について考える前に、まず当該イントネーションと間投助詞を伸ばした音調を比べてみよう。図Ⅱ2-1、2は男子高校生、図Ⅱ3-1～3は大正5年東京下町生まれの女性の発話のピッチパターンである。これらの各図から、長く伸びた間投助詞の部分といわゆる「尻上がり」イント

図Ⅱ2-1 10代男性の発話

コンビニとかでえ 買ったもん食べててえ



図Ⅱ2-2 10代男性の発話

コンビニとかさあ ファーストフードってさあ



図 II 3-1 70代女性の発話

だけどもお (中略) 字を書いてえ



図 II 3-2 70代女性の発話

夜んなるとねえ つるべがねえ



図 II 3-3 70代女性の発話

それでね(中略) こううなぎね こう



ネーションの部分のパターンがよく似ていることが分かる。また当該イントネーションが、図 II 3-3 の短く高い「ね」とは少し異なっていることも分かるだろう。

また、間投助詞のあるところには当該イントネーションはなく、逆に当該イントネーションのあるところには間投助詞は現れにくい傾向も、後述するように明らかである(注 1)。当該イントネーションの出現箇所は 2-3 で詳述するが、間投助詞と補い合う分布を示している。

当該イントネーションと長く伸びた間投助詞との音響的特徴の近似と、両者の分布傾向がある程度理解されたところで、「ネ・サ・ヨ」禁止運動と当該イントネーションの関係について考えよう。

「ネ・サ・ヨ」禁止運動は鎌倉市の腰越小学校で 1950 年代後半に始まった。1960 年 12 月 12 日の朝日新聞によれば、鎌倉市立腰越小学校では「くらしのことば研究委員会」をつくって言葉を良くする「ネ・サ・ヨ運動」を 3 年前から続けているという。そして同じ悩みを持つ全国各地の小学校が手を結び 1961 年新春早々から全国ネ・サ・ヨ運動を始めることになったと報じられてい

る。「言葉が悪いと進学や就職にもマイナスになる」というのが一つの理由であるようだ。しかし、記事からは背景に新住民と生え抜き住民との摩擦の存在も伺える。湘南の「荒い漁師用語が幅をきかせていた」のを新住民である「別荘族」が嫌ったようである。同紙によれば、まず学校で子供の言葉を「改善」し、「次第に大人の世界へ広めて行った。」という。また、その結果「この町ぐるみの運動で別荘族と生え抜き住民とのかきねがだんだんなくなり、町が明るくなったという。」とある。さらに同紙によれば、この運動は「“ネ”を使うのを絶対にやめるというわけではなく」、語呂がいいので「キャッチフレーズにしたわけだ」という。しかし、悪い言葉を使ったために黒く塗られたネサヨ人形(よい言葉を使った場合はきれいな色に塗る)を焼くという祭りを地区の年中行事として行ったというから、この運動の社会的な圧力の高さは推して知るべきだろう。

また対談を記述した水谷他(1980)によれば、林大は「…それで、「ね・さ・よ」追放運動というのがあったわけです。追放しちゃうと、子供たちはなにもしゃべれなくなった。それで、「ぼくがねエ」と言っていた「ねエ」を」はずしたところに、イントネーションが加わったんですよ。」と述べている。この他、山口(1993)も「…この言い方(いわゆる「尻上がり」や川上(1956a)の言う講演の際の音調*筆者注)の役割が、間投助詞の役割と同じものだからである。…(中略)このように間投助詞は人に話しかける話し言葉にとって絶対不可欠な要素となっていると思われる。その意味で、当該句末音調(いわゆる「尻上がり」や川上(1956a)の言う講演の際の音調*筆者注)は機能的には間投助詞と何ら変わらない。…(中略)すなわちこの言い方は終戦後日本の「普通の人」が社会的に人前で話しをする機会が多くなるにともなって顕現した。その場合、学生など地方出身者が演説などで出身方言のナモシ、ネヤ、ヤー、ナモといった地方色豊かな間投助詞を出したら、雰囲気上演説はぶちこわしになるので、それを控えたためにその代用話法として登場したのである。同じように、学校の子供たちが教室で先生から「間投助詞」を禁じられた結果登場した。」と述べている。さらに上村(1989)も「この音調(いわゆる「尻上がり」イントネーション*筆者注)は最初、学生運動の中での演説口調においてとくに耳にたったものであったが、しだいにのおおくのわかい世代のほとんどすべての種類の会話の中にあられるようになった。そしてそれとともに、かつて東京とその近郊のわかい世代の会話でおおいに目だった間投的に用いられる「ね」、「さ」などの使用がきわだって減少した」と指摘している。

このように「ネ・サ・ヨ」禁止運動による「間投助詞」使用の減少と当該イントネーションの普及の関連性を指摘するものは数多く見られる。また、柴田(1977a)によれば、当該イントネーションは「東大紛争の頃から、まず女子学生にあらわれた」という。禁止運動当時の小学生が大学生になっていく時期ともほぼ符合する。これも、長く伸ばす「ネ・サ・ヨ」の代償として現れた可能

性を示唆する傍証だと考えられる。

また、これより早い時期に川上(1956a)は「日常の対話には現れず、専ら講演の際などに用いられる」句末の「昇降調」の存在を指摘している。この「昇降調」について川上(1993)は、当時若者が始めたものではないと断り、当該イントネーションとは違うものとして扱っている。しかし、川上(1992)では、この音調は「この今日の若者の句末音調(いわゆる「尻上がり」を指す*筆者注)とほとんど同じ形の句末音調」だとも述べている。講演の際の音調は、その直前部より高く始まり、新しい句末音調(いわゆる「尻上がり」*筆者注)は直前部より高まらない点が異なっているという。ただし、後に川上(1993)で両者は、意味用法が同じという理由から「上昇の有無を捨象して一体視」される。そして上昇の程度差(高まり方の差)は、「相手に対して持ちかける熱意の程度の差」、先行語のアクセント型の違いによる「単なる生理的事情」、「この音調を嫌うもののあることを知る者」の「遠慮の現われ方の違い」などによるものではないかとの推測が述べられている。いずれにせよ、講演の際のそれも、いわゆる「尻上がり」イントネーションも文中の現れる箇所はほぼ同じで、それは間投助詞の入る位置に相当する。間投助詞の音調というのではなく、すでに存在していた講演の際の音調を、日常の対話の中でも「ネ・サ・ヨ」が禁じられるような改まった場面での対話に援用した可能性も否定できない。この点に関して山口(1993)も、川上の「講演の際の音調」については、「講演」でも何でもないときにもそれを「多用」し、「全国の小中学校生徒たちが教室で用いる口調になっているのが事実である。」と述べている。そして、「テレビを通しての観察だけで言う」と断りつつ、講演の際の音調(つまり、川上が言う「直前部が高まる」音調*筆者注)に代わって「高まらない」音調(山口の言う単純下降調、新しい句末音調*筆者注)を用いる人が多くなったと思う、とも述べている。

さらに、柴田(1977a)、原(1992)、山口(1993)が指摘するように、日本語の中で十分確立していなかった、一般の人が不特定多数の人に話しかけるスタイル(書き言葉における文体に対応する話し言葉の「文体」として、「話体」と言うべきかもしれないが、以下、文体という言葉で表す)、パブリックスペースでの話し方の一つとして当該イントネーションが積極的に採り入れられたという側面も見落とすことはできないだろう。柴田(1977a)は「…右のB(「だから あー、それで えー」のように「アー」や「エー」を挟む言い方*筆者注)でもない、C(「だから(です)ね、それで(です)ね」のように間投詞を入れる言い方*筆者注)でもない、文章を読むような話し方は、アウンリーによくある型で、硬い、そっけない感じを与える上に、説得的でない。そこで出て来たのが A(当該イントネーション*筆者注)のようなイントネーションではないかと思う。」と述べ、さらに「日本語は不特定多数を相手にことがらを説明するような話し方をいまだ模索中のように思われる。「ダカラー・イントネーション」(当該イントネーション*筆者注)はその現代

的試みの一つなのであろう。」と結んだ。

いずれにせよ、何を起源にこのイントネーションが使われるようになったかは、推測の域を出ない。井上(1994, 1997)が指摘するように日本語イントネーションの体系内で、他の調子と区別する上でこの「昇降調」が効果的な音調であったことや、杉藤(1983)が指摘する言語内的な要因(注2)も、当該イントネーションが広がった大きな要因の一つだろう。

このイントネーションの出自に関する問題を解決するのは容易なことではない。しかし日本人の談話行動の変化という通時的な問題とともに、談話場面ごとの「話調」の違いという共時的な問題、談話レベルの語用論上の問題など様々な問題を考えていく上での一つの契機となる興味深い現象であることは確かだ。

2-1-3. 評価の問題

以上見てきたように、名称や出自の問題を考えると当該イントネーションが非常に興味深い社会言語学的現象であることが理解されるだろう。社会言語学的には興味深い現象ではあるが、当該イントネーションが「問題」になった当時(1980年代)の評価は当然芳しくない。現在でも時おり「嫌われる物言い」として紹介される。ここでは、はじめに当該イントネーションが一般にどのように評価されたか見ていく。

先に述べたように、当該イントネーションについての扱いは、様々な流行語や新語に対してのそれとよく似ている。一般に「年配」の「有識者」には不評である。さらに、このイントネーションに対する評価は、多くの場合非常に感情的であるのも特徴的だと言える。あからさまに嫌悪感を示す発言が非常に多く見られる。柴田(1977a)は「好みから言うと、木下順二さんや千田是也さんと同様、わたしもこのイントネーションは嫌いである。」と述べ、水谷他(1980)における当時のNHK 総合放送文化研究所長、黒野郷八郎は「例のイントネーションですね、「そこでエ、ぼくはア…」とかいう、尻上がりになって延ばすのがありますね。これは主観的に言えば許しがたいほどきらいなんです。」と憤る。また山内(1988)は「やたら助詞を力んだり下げたりして引っぱる奇妙に甘えた話し方…(中略)この話し方しかできない世代が増えつつあるのには、哀しいというより、私はゾッとする思いです。」との言葉もある。江國(1989)に至っては「若い者たち、特にギャルといわれる小娘たちが、口をひらけば語尾を不必要にひっぱる、あの気色の悪い語法について、多くの大人たちが不快の念を表明したり、たしなめたり、批判したりしていたのはずいぶん昔のことで、今では誰もなんにもいわない…」と厳しい。朝日新聞(1990.9.3)の大岡信「折々のうた」欄では小暮政次の詠んだ「偽りなき声ならむしかし撥ねあがる語尾が不

愉快で不愉快でならず」という歌が紹介され、ごく最近(2002.9.12)も小出秋光の「放屁虫より嫌いな「とか」言葉」という句について、「いずれにせよ作者は、会話で「…とかア」を連発する無気力な喋り方を虫酸が走るほど嫌っている。それはこんな甘ったれた物言いが流行する現代社会への愛想づかしなのだ。」との大岡による解説が付されている。この他にも、外山(1981)のように「変な日本語である。おかしい。耳のしっかりした先生が多ければ、なおさせただろうが…」と言うものや、山内(1988)のように「この画一的な助詞カミがもつとも日本語を乱している、日本語のイントネーションを破壊している元凶だと、私は思います。」という、「規範から外れている」という点を批判したものも見られた。

以上から、エッセイなどに見られる当該イントネーションに対する識者の反応は、それ以前から指摘されていた「ら抜き言葉」や「鼻濁音」などと同様か、むしろそれ以上に厳しいものだとすることが伺える。一般の人を対象にした NHK の調査(NHK1980)でも、このイントネーションについて「非常に気になる」と「多少気になる」と答えた人の合計は約 60%、学歴別では大卒以上の場合 70%、また年齢が上がるほどその割合も高い、という結果が出ている。しかし、その後も当該イントネーションの使用者層は拡大し続け、現在ではテレビの討論番組では当たり前のように使われている。江國(1989)は「この語尾(当該イントネーションを指す*筆者注)はすでに二世代を制覇したのである。」と言うが、原(1992)の調査で幼稚園児による使用が確認されたし、筆者の 60 代の母も使っている。筆者の観察ではすでに三世代目も「完全制覇」の感がある。柴田(1989)によれば「一時ほど目立たなくなったが、むしろ、上の世代にも浸透し始めている。」とのことであり、井上(1997)によれば「首都圏には着実に普及し、さらに現在全国に拡大中である。」という。21 世紀を迎え、1980 年代に聞かれた激しい非難の声はあまり聞かれなくなった。

なぜ当時は非常に厳しい評価を受けたのか、そしてそのような評価にもかかわらず、なぜ使用者層が拡大していったのかという問題に対して明確な証拠を示すことは困難であろう。しかし、当該イントネーションの使用者の意識から、それらの答を推測することはある程度可能だと考える。詳しい実態調査や当該イントネーションの社会言語学的考察に関しては後の 2-4 に譲るが、次の 2-1-4 では、当該イントネーションの使用者である筆者の使用意識についての内省と年来の参与観察からこの問題について考察する。

2-1-4. 使用意識と評価の乖離と使用者層の拡大

方言調査で「こんな言葉を使いますか」と質問すると「いやあ、今はもうそんな方言使う人はいないねえ」などという答が返ってくるのに、調査が終わって気心の知れた家人などを交えて

雑談するときになると「そんな方言」が飛び交うということがある。自分の言葉、言葉遣いを客観的に内省、観察するのは実は難しい。一般に他人の言葉遣いを論じる時、自分のことは棚に上げている場合が多い。通常意識しにくいイントネーションに関してはなおさらであろうか。

筆者が当該イントネーションの使用者であることに気付いたのは、1990年の大学院のゼミで当該イントネーションが取り上げられた時である。そういう話し方が存在するのは当時も知っていたし、それが歓迎されていない話し方であることも知っていた。そして先に見た各種のエッセイなどと同様に、いわゆる「尻上がり」イントネーションは、「ミーハー」な若い女が使う流行語で、それを改まった場面でまで使うのは、敬語が使えないのと同様、教養がないからに違いない、と思っていた。どんな場面であれ自分が使っているとはまったく考えてもいなかった。したがって当該イントネーション非難はまったくの他人ごとだと思っていた。ところが、そのゼミで自分や友人の発言をイントネーションに注意して聞いてみると、議論が進むうちに、友人ばかりか自分も当該イントネーションを使って話していることに気付いた。なかには自分が当該イントネーションを使っていることに発言途中で気付いてしまい、苦笑し出す人もいた。当時、当該イントネーション(話者)非難を傍観者の立場で漠然と支持していた自分自身が、まさに非難の対象であったことを自覚した瞬間の衝撃は忘れ難い。

筆者の内省と観察から、筆者も含め当時多くの人、特に言葉に対する規範意識が高い人は、当該イントネーションを、ある種の人を使う「新しい」、「変わった」、「非難されるべき」イントネーションであることを知ってはいた。それでも自分自身が使用者であるという自覚はほとんどなかったようである。面接試験など、非常に改まった場面では話しの内容とともに「話し方」にも非常に気を付けるため、当該イントネーションが現れることはほとんどない(はずである)。しかし、それほど改まった場面でなく、何かの手順や道順を説明する際や、討論や会議など、朗読ではなく自分の意見を発表する場合は、「話し方」にまで注意をすることはあまりなく、筆者と同世代の人は男女を問わずほとんど無意識のうちに当該イントネーションを使っている。

1980年代は、「ブリッコ口調」という俗称もあったように、当該イントネーションはあたかも聞き手に媚を売るために(主に女性によって)使われるかのような印象さえあった。当該イントネーションが騒がれた当時には、実際そういう気持ちで使う人がいなかったと断言することはできない。しかし筆者を含めた多くの当該イントネーション使用者は、気がついた時には当該イントネーションを、ある場面では自然に使うようになっていたのである。必ずしも「若く見せたい」とか「可愛く見せたい」と意図して使っていたわけではない(2-4-3参照)。しかし、自分を含まないあるタイプ(もちろんステレオタイプ)の他者が使う「尻上がり」イントネーションに対しては「甘ったれている」、「かわいこぶってる」、「耳障りだ」などと安易に非難していたので

ある。

このように、他者の当該イントネーション使用に対する評価と自己の当該イントネーション使用意識は非常にかげ離れている。これは、2-4-1 で後述するように当該イントネーションの認知を曖昧にする一因でもあると考えられる。そして、当該イントネーションの使用意識、あるいは採用過程が単なる流行語のそれとは違う点に、使用者層拡大の原因があるとも考えられる。単なる流行ならば時間とともにその新奇性を失い、それ故に「流行遅れ」のレッテルが貼られるため使用者が急減する。それにもかかわらず使用者が増加しているということは、単なる流行語としての視点だけでは説明がつかない。流行語として取り入れた側面もあったかもしれないが、おそらく、実際の言語生活の中で当該イントネーションを必要とする場面や人自体が増えたことが、使用者増加の主要因だと考えられる。

なぜこのように使用者層が拡大したのかを考える前に、ここでは、筆者をはじめとする当該イントネーションを積極的に採用した覚えのない、現在多数を占める当該イントネーション使用者が、いかにしてこれを習得してきたかについて考えてみたい。先に述べたように筆者が当該イントネーション使用者であることを自覚したのは大学院生のときである。筆者自身、当該イントネーションをいつ頃から使い始めたのかまったく記憶がない。しかし、「良くない話し方」であることを知っていたわけだから、意識的に習得しよう、真似しようとして当該イントネーションを獲得したとは考えにくい。また、筆者にとっての母語には存在していたイントネーションだからこそ、他のイントネーションと同様、覚えた記憶さえないのではないかも考えられる。

ここで最近の言語獲得に関する知見を詳細に検討する余裕はないが、Mehler 他(1988)によれば、音声情報なしに韻律情報だけで、生後4日のフランスの新生児はフランス語とロシア語を、生後2ヶ月のアメリカの乳児は英語とイタリア語を弁別知覚するという(注3)。今西(1999)の推測によれば、このような生後間もない子供が手がかりとする韻律情報は、すでに母親の子宮内の音響経験から得られているという。また Jusczyk(1993)は同一のバイリンガル話者によって発話された英語とノルウェー語(両語は韻律的特徴が異なる)の単語をアメリカの6ヶ月の乳幼児に聞かせたところ、英単語に対してのみ聴覚選好(注4)が見られ、音声情報を除去しても同様の結果が得られたと報告している。つまり、6ヶ月頃までには母語の韻律的特徴が獲得されているということである。さらに Jusczyk 他(1993)は、6ヶ月児には見られない、英語で優勢と見られる強勢型に対する聴覚選好が9ヶ月児には見られるようになるとしている。これらの研究からも、韻律的特徴の獲得は1歳になる前の、かなり早期に行われていることは明らかである。

実際、筆者の子供は1歳半頃、物をもらうときにいつも「はい(高)、どう(低)ぞっ(高)!!」と言わ

れるので、自分がほしい物をねだるとき、まだ「ド」や「ゾ」の発音ができないうちでも「アイ(高) オー(低) オッ(高)！」や「ハイ(高) ジョー(低)ジョッ(高)！」と、同じ節回しで言っていた。また2歳近くになると、毎晩風呂で「いいちっ、にいいっ、さあんっ、…じゅう！。じゅういち、じゅうに…」と数えるのを聞いていたため、まだ各数字の音は順不同に言うのだが、韻律は把握していて、「じいちっ、ごおおっ、ちいちっ、ああちっ…」ときて、ほぼ十にあたるところで、大きい下降をともなつて、口を尖らせて「じゅう！」に近い発音し、その後に長めのポーズを取ることも忘れず、「じいちっ、じゅうちっ…」と続けるようになった。また以前、ようやくひらがなを読めるようになったばかりの姪が絵本を開いて「む、か、し、あ、る、と、こ、ろ、に、…」と一昔前のロボットのように読むのを見て、まだ言葉もおぼつかなかった上の子(当時2歳前)が本を開いて指でつつきながら「う、あ、あ、え、え、う、…」のように真似していた。そういう読み方に接したのは彼にとってそれが初めてだったので、おそらくよほど印象に残ったのだらうと思われる。韻律、特に句末に現れる音調は、間投助詞も含め、子供には習得しやすいようである。先の姪も、4歳になり福島県喜多方市内内の保育園へ通うようになるとすぐ(5月の連休に会った時には)、「それでえね、だからあね、先生があね」という地元の話し方を、それまで使っていた「それでね、だからね」や当該イントネーションの代わりに使うようになっていたし、3歳のときに東京から新潟市の保育園に移った筆者の子も友達と遊ぶ機会が増えた頃、保育園での出来事を話すときなど、「それでね、先生がね、…」や当該イントネーションに代えて、「それでな、先生がな、…」という新潟の年配の人が使う調子を、使うこともあった(祖父母と同居の友人が多く、中には「～な、～な」を使う子もいる)。関係があるかどうかはわからないが、言葉が十分できない時期に歌を覚えるときも、フレーズの最後(例えば「きらきら光るお空の星よ」の「よ」の部分)は初めの部分(この例では「きらきら」の部分)と同様に、他の部分より比較的早く発音できるようになる傾向があるようだ。

子供の当該イントネーションの習得に関して言えば、筆者が1989年に行った小学校低学年児童や幼稚園児対象の調査では、早い子で3歳頃には当該イントネーションを使うことが分かった。使う場面は一般に指摘されている通り、何かの作り方を説明する、何かの理由や事情を説明するときである。筆者や友人の子供も2歳頃から、「にーにとお、パパとお…」などと列挙したり、「こーってえ(こうして)、こーってえ…」などと何かの手順を説明したりする場面から当該イントネーションを使い始めた。「可愛く見せよう」、あるいは「流行だから」という意図で使っているとは考えにくい。親や周りの人間(友達や先生)の言葉から習得したと考える方が自然だろう。子供は、周りの言葉、特に親や同年代の子供の言葉を、韻律も何もかも含めてまると敏感に受けとり、非常に短期間でそれを自然に身に付けていくようである。一般に「子

供は語学の天才だ。」などと言われる所以だろう。

しかし「語学」と言っても、子供が言葉を覚える時は、大人が外国語を学ぶように、「これは机です。」や「wh-で始まる疑問文は文末が上昇しない。」などのように覚えるのでないことは言うまでもない。常にその言葉が発せられる必然的な場面が伴っていることが普通である。一つひとつ教えなくても、怒っている時の、小さい子をあやす時の、デパートでアナウンスする時の、朗読する時の、言葉やその言い方つまり全体的な調子を、たとえ一つ一つの言葉や音を発音できなくても、遭遇した場面とともに覚えていく。韻律に限らず、言葉の習得は場面と切り離すことができないことは明らかだし、子供の場合にはそれが非常に顕著である。

だから、子供たちが遭遇したことの無い場面では、話せなかったり、適切な話し方ができなかったりしても不思議ではない。口をきかないか、知っている場面での話し方を援用するかのどちらかになるのはごく自然なことであろう。先に「ネ・サ・ヨ」を追放した結果子供たちが何もしゃべれなくなったという水谷他(1980)における林大の言葉を紹介したが、それは当然だろう。自分自身が人前で話す経験がないだけでなく、手本となる身近な人間が人前で話すような場面に遭遇したことがなければ、それに応じた話し方の「型」を習得できないのだから話せなくて当然だと考えられる。

ところで詳細は2-3-1に譲るが、当該イントネーションが現れやすい場面については、会議などで自分の意見を筋道立てて人に説明したり、道順や何かの手順を人に教えたりする場面に多いことがこれまでも指摘されている。インフォーマルな場面では依然として「ネ・サ・ヨ」も使われているが、ややフォーマルな場面では「ネ・サ・ヨ」は現れにくい。以前は当該イントネーションを必要とするような比較的フォーマルな場面に遭遇する年齢も高く、そのような場面に遭遇する人口も全年代層を通じてずっと少なかつただろう。多くの人にとって「ネ・サ・ヨ」さえあれば事足りたのである。しかし、現在では、当該イントネーションを必要とする場面に遭遇する年齢は以前より低くなり、その人口も増えた。つまり、当該イントネーションを必要とする人や場面自体が格段に増えたのである。柴田(1977a)が当該イントネーションを「ダカラー・イントネーション」と呼び、「現代的試みの一つなのであろう。」と指摘したのもそのためであろう。

当該イントネーションが頻出するような場面、つまりパブリックな場で、自分の意見を筋道立てて述べたり、物事の手順を説明したりする場面は、ある年代以上の人にとっては、「あるとき」から急に出現したものとして受け取られたものではないかと考えられる。その「あるとき」というのは、おそらく日本がアメリカによって全体主義国家から民主国家への脱皮を余儀なくされた戦後から、と言えるだろう。したがって、その場面にふさわしい話し方も、一般に

はこれ以降急遽必要が生じたものと考えられる。そしてその場面にふさわしい話し方が十分に確立していなかったとは言え、少なくとも「NHK のアナウンサー」がマスメディアでは使わないような当該イントネーションが、適切な話し方であるとは考えられていなかっただろう。

一方、ある年代(1950年代後半～1960年頃か)以降になると、日本社会に一応、民主化の波が行き渡るため、パブリックな場で何かを説明したり意見を整然と述べたりする場面が相当一般的になった。多くの人が学校教育などを通じてかなり小さいうちから(先に見たように胎内にいる頃からとも考えられるが)、それらの場面に遭遇するため、そこでの話し方を自然に習得していったのではないかと考えられる。またこの時期は、そのような場面では、「アー」や「エー」の挟まる話し方も批判され、「ネ・サ・ヨ」追放運動も始まっていた。規範的にはアナウンサーのような話し方が良しとされていたかもしれないが、それは誰にでもそう簡単にできる話し方ではないから、結果的には使用者拡大中の当該イントネーションを聞く機会が増え、これをその場面用の話し方と捉える者も多かったものと推測できる。そのため、ますます当該イントネーション話者が増えたのではないかと考えられる。

何百年かの長いタイムスパンで普及しつつある「ら抜き言葉」(井上 1998, p.20)と違い、当該イントネーションの場合、社会的な需要が高かったため、テレビ、自家用車、携帯電話などと同様、短期間で普及率を上げたのだろう。「ら抜き言葉」の普及に関して井上(1998, p.21)が指摘するように、「電気製品の普及、ミニスカートの流行などで確かめられている変化のパターン」で、事物の普及に見られる「はじめゆっくり、途中で早くなり、最後にはまた遅くなる」パターンは、当該イントネーションの普及にも見られるだろう。当該イントネーションに関して言えばおそらく、1950年代頃(あるいはそれ以前)から70年代前半頃までが初期のゆっくりと普及した時期で、1970年代後半から1980年代前半がちょうど急速に普及していく時期で、1990年代以降が最後の普及が遅くなる時期にあたると思われる。1980年代に、特に激しい当該イントネーション非難が起こったのは、このような「急」普及期と重なったことも一因だと考えられる。

先に当該イントネーションに対する評価とそれを使う人の使用意識に大きな隔りがあることを述べた。当該イントネーションに対しての評価は、「ら抜き言葉」など他の言葉遣いに対する評価と同様、それが「新参」形式であることを知り、基本的にはこれを正しい形式だとは認めない年代の人々によってなされている。この年代層より若い世代は次々と当該イントネーションを当たり前のものとして自然に習得していったわけだから、「新参」かどうかはわからなければ、「正しくない」とも思わないのが普通である。それでも、前者によってなされた批判を後者が「規範」として受け容れたのは、教育を通じて「知識」や「教養」として「ら抜き言葉は間違っている」ことを知るのと同じである。少なくとも自分より「権威」のある者の言うことだから

ら、そのような「権威」を認め、受容できる程度に言葉に対する規範意識の高い者ほど(自分の言葉はどうであれ)、そのような知識自体は持ち得る。井上(1998,p.30)でさえ「筆者はラ抜き言葉を使っていないつもりだった。」のが、「自分の講義のテープをあとで見たら、なんと自分でも使っていた。」と言う。当該イントネーションをめぐる評価と使用意識の乖離が生じた背景には以上のような事情があったのではないかと推測できる。

以上、筆者の内省と観察をもとに、当該イントネーションの実際の使用意識を探り、この意識が、当該イントネーションをめぐる評価と大きく乖離していることを指摘した。そして当該イントネーション使用が拡大していった背景に、当該イントネーションの使用される場面の増加があり、年代による当該イントネーションの習得過程の違いによって、実際の使用意識とそれらに対する評価が乖離したのではないかと推測した。これは当該イントネーション使用者としての筆者の内省と、当該イントネーションをとりまく状況からの非常に雑駁な推測にすぎない。多くの被験者を対象にした当該イントネーションの使用意識や当該イントネーションを伴う発話に対する印象について実証的な調査結果の検証は2-4で改めて詳述する。これらをもとに、2-4で再び評価や印象から当該イントネーションに関するステレオタイプについて考察していく。しかしその前に2-2、2-3で実際の当該イントネーションの音響的特徴や談話・文法上の機能について明らかにしておかなければならないだろう。

2-2. いわゆる「尻上がり」イントネーションの音響的特徴

これまで当該イントネーションの名称、出自、評価及び使用意識をめぐる問題点について概説してきた。しかし、先に述べたように当該イントネーションの社会言語学的研究は井上(1994、1997)や原(1992、1993a、b、1994a、b)で、ごく僅かに行なわれているだけである。これらの社会言語学的考察や談話・文法上の機能について考える前に、詳細な音響音声的特徴を明らかにする必要がある。川上(1993)が指摘するように、先行語のアクセント型の違いによる「単なる生理的事情」から、当該イントネーションの音調パターンが微妙に異なることもあるからだ。そこで、佐々木(2000b)をもとに、実際の談話ではなくインフォーマントの読み上げる音声を利用して、いわゆる「尻上がり」イントネーションの音調面のうち、先行語のアクセント型別の特徴を明らかにする。その際、他の句末イントネーションとの比較も試み、当該拍の長さ、ピッチの動向、当該拍内のピッチの変化率の面でどのような特徴があるか、詳細に見ていく。

ピッチの動向については、従来のような音声分析ソフトによる実測値をそのままプロットするタイプのピッチパターンではなく、実測値をインフォーマントごとに標準化し、同一アクセン